

横尾 敬介氏

みずほ証券 取締役社長

#138



紹介者



山下 徹氏
NTTデータ 取締役社長

まだ、肌寒さの残る3月初旬、奈良の東大寺「お水取り」の季節、ある方のお招きで、世界文化遺産登録で有名な『律宗總本山唐招提寺』を訪ねる機会を得た。お目当ては勿論、鑑真和上御影堂とそこに描かれている、あの東山魁夷画伯の障壁画である。

鑑真和上御影堂は、唐招提寺の奥深くにある。南大門を入ってすぐ正面に金堂があり、それに続いて講堂、礼堂、鼓楼と、天平期・鎌倉期の重厚な建築の数々、境内を巡って遠い世の極め

て優れた文化の面影を満喫することができ。東門の近くに開山鑑真和上の御廟所があり、その新しい築地塀の中に、和上の尊像を安置する御影堂がある。拝観できるのは、開山忌の6月6日の前後3日間だけ、お厨子の扉が開かれるとの由。残念ながら、和上の尊像を直接拝観することはできなかったが、その周りに描かれている東山画伯の障壁画を心ゆくまで堪能することができた。

御影堂ならではの静寂さとお香の匂い。その中で、初春の日の光りに照らされ、映し出される、日本風土の象徴としての山と海

を、東山画伯独特の群青、緑青という岩絵具で描いた「山雲」10面、「濤声」16面。堪能すること2時間余り、美術館の一般公開で見るとはまったく異次元の鳥肌の立つような感動、いや感激を味わったことを今でもはつきりと記憶している。1200年を超える昔、多分、和上の在世中に着手されたこの尊像（お厨子の中の）は、静かに閉じた両眼の奥に何を湛えていたのだろうか。

今回、案内をお願いしたが、執事の方にお伺いしたのだが、昭和45年の暮、唐招提寺長老 森本孝順師が希望され、東山画伯は、その翌

次回

秋山隆英氏

シービー・リチャードエリス 取締役社長・CEO

にご登場いただきます。

一泊二日の歴史ロマン～タイムスリップの旅？

年の6月、開山忌に御影堂の和上像を拝し、漸く心を決めて、その翌月承諾をしたとのこと。東山画伯にとっても、相当勇気のいる決断だったと思う。和上像を拝し、あの閉じられた両眼の奥に湛えられているものは何か、想いを馳せたのであろう。その想いが、これら障壁画に東山画伯生涯における大作として込められているはずである。

一泊二日の歴史ロマン、タイムスリップの旅は、私の心に「勇氣」と「静けさ」を与えてくれた。生涯の思い出に残る良い旅であった。